

# 利他とは何か

中島岳志

# コロナと利他

- マスクの着用  
→他者にうつさないために
- エッセンシャル・ワーカー
- 医療従事者への感謝
- クラウド・ファンディング
- 寄付



# 東京工業大学・未来の人類研究センター

- 2020年2月発足
- 「利他プロジェクト」



# 自己責任論と小さな政府

- 構造改革
- 官から民へ
- 規制緩和
  - 「小さすぎる政府」に
- 自己責任論
  - 生活保護バッシング



# 「利他」と「利己」

- 利己的行為の動機づけ
  - 「ほめられたい」
  - 「名誉を得たい」→利己的・我欲
  
- メビウスの輪としての「利他」と「利己」  
→「聖道の慈悲」



# 頭木弘樹 『食べることと出すこと』



人間は、  
食べて出すだけの  
一本の管。  
(だが、悩める管だ……。)

医学書院

個性的なカフカ研究者として知られる著者は、大学生のときに潰瘍性大腸炎という難病に襲われた。食事と排泄という「当たり前」が当たり前でなくなったとき、世界はどう変わったのか？  
絶望的な日常と、絶望だけして  
いるわけにはいかない日常。その  
狭間に漂う不思議なユーモア。

潰瘍性大腸炎で食べられないものがある

仕事の打ち合わせで、相手から案内された店に行くと、お勧めの料理が既に注文されており、「これおいしいですよ」と勧められた。しかし、それは食べることができないもの。相手も頭木さんが難病を抱えていることを熟知している。



- 「すみません。これはちょっと無理でした」と返事をすると、一度は「ああそうですか。それは残念です」と引き下がってくれたものの、しばらくするとまた同じものを勧めてきて、「少しぐらいは大丈夫なんじゃないですか」と言う。手をつけずにいると、周りの人まで「これおいしいですよ」とか「ちょっとだけ食べておけばいいじゃないですか」と言い始める。
- 「おいしいものを食べさせたい」という利他的押しつけは、頭木さんにとっては恐怖ではない。



いくら相手のことを想って行ったことでも、  
相手を自分の思い通りにコントロールしようとする  
ことは、利己的な行為になる

相手の主体に沿うことが重要

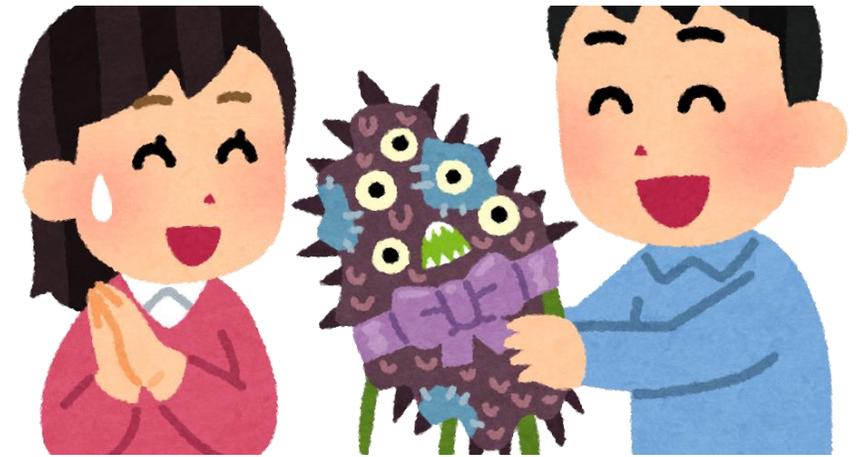
# 「NHKのど自慢」の伴奏



利他が成立するのは、受け手の潜在能力  
(ポテンシャル) が引き出されたとき

# 利他は受け取られることで起動する

- 「ありがた迷惑」という問題
- 利他は「与え手の意志」に還元されない
- 利他の時制
  - 「あの時の一言」
- 「弔い」と「利他」
  - すでに受け取っていることへの気づき



# 与格という文法

- インドのヒンディー語
  - ・ 主格（～は）と与格（～に）
- 「私は嬉しい」  
→ 「私に嬉しさが留まっている」
- 「あなたを愛している」  
→ 「私にあなたへの愛がやって来て留まっている」

\* 行為が意志の外部に規定されているとき、与格を用いる



# 言葉はどこからやって来るのか？

- 「ヒンディー語、できるの？」  
→与格を用いる

- 言葉は私にやって来る
- 「神」という源泉
- 私という器
- 主格と意思への懷疑

अ आ इ ई उ ऊ ऋ ए ऐ ओ औ  
a ā ī ī u ū ṛ ē ai o au

क ख ग घ ङ  
ka kha ga gha ṅa

च छ ज झ ञ य श  
ca cha ja jha ṅa ya śa

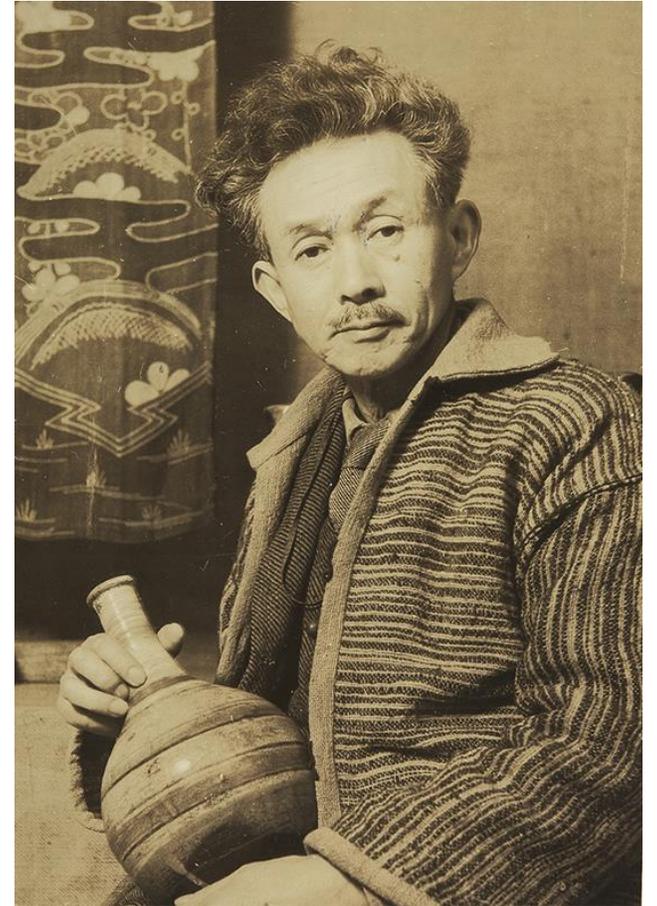
ट ठ ड ढ ण र ष  
ṭa ṭha ḍa ḍha ṇa ra ṣa

त थ द ध न ल स  
ta tha da dha na la sa

प फ ब भ म व ह  
pa pha ba bha ma va ha

# 柳宗悦の「民芸」

- 職人の世界
- 「美しく作ろう」という「計らい」の超克
- 無名性
- 「用の美」
- 「自ずから現れる美」 = 「他力の働き」



# 志賀直哉「小僧の神様」

- Aに湧き上がる「変に淋しい気持ち」
- 「Aは変に淋しい気がした。自分は先日小僧の気の毒そうな様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、こうもしてやりたいと考えていた事を今日は遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していい筈だ。」
- 「ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持ちは。何故だろう。何から来るのだろう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持ちに似通っている。」
- 屋台で見かけたとき身が動かなかったこと、pity（哀れみ）

## 小僧の神様

他十篇

志賀直哉作



志賀直哉(1883-1971)は、他人の文章を褒める時「目に見えるようだ」と評したという。作者が見た、屋台の

すし屋に小僧が入って来て一度持ったすしを価を言われて置いて出て行った、という情景から生まれた表題作のほか、「城の崎にて」「赤西彌太」など我孫子時代の作品を中心に11篇を収めた。作者自選の短篇集。(解説=紅野敏郎)



緑 46.2  
岩波文庫

# 席を譲るとき

- 「どうしよう」と悩んでから、席を譲ったときに残るモヤモヤ
  - 「偽善？」 「哀れみ？」
  - 「よい人に思われたい？」
  - ⇒ 主格的行為
- 何も悩まず、即座に席を譲ったとき
  - 身が動く。計らいを超える
  - ⇒ 与格的行為



思いがけず利他

身が動く器になること